

パウルベ方程式の多項式ハミルトニアン

東大 理 岡本 和夫

〔序〕 1973年から76年にかけて、T.T. Wu, B.M. McCoy, C.A. Tracy, E. Barouch 等は2次元 Ising モデルの2点相関函数のある種の極限(*scaling limit*)にあらわれる *scaling* 函数を具体的に閉じた形で求めることに成功した([1])。その函数 $F(t)$ の主要部は次のように与えられる:

$$(1) \quad F(t) \sim \exp \int_t^\infty \frac{s}{4\lambda(s)^2} \left((1-\lambda(s)^2)^2 - \left(\frac{d\lambda(s)}{ds} \right)^2 \right) ds$$

$$t' = \frac{1}{2}t,$$

ここで $\lambda = \lambda(s)$ は次の2階方程式の解である。

$$\frac{d^2\lambda}{ds^2} = \frac{1}{\lambda} \left(\frac{d\lambda}{ds} \right)^2 - \frac{1}{s} \frac{d\lambda}{ds} + \lambda^3 - \frac{1}{\lambda}.$$

これは、パウルベの方程式の3型(以下 P_{III} と記す)において、 $\alpha = \beta = 0$, $\gamma = -\delta = 1$ としたものである。彼等がこの事実を得るために用いた本質的な道具は、線型方程式のE

ノドロミを不変にする変形理論である。このことは、いち
はやく佐藤、三輪、神保の三氏によって注意され、彼らは上
記の結果を拡張して2次元 Ising モデルの n 点相関函数を計
算することに成功した。のみならず、彼らの研究は他方面に
わたって興味ある結果をもたらした。そのなかのひとつ[2]
において、一次元周期的 n 体問題

$$-\frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2} + c \sum_{i < j} \delta(x_i - x_j)$$

$$0 \leq x \leq L$$

を、極限 $c \rightarrow +\infty$ において考察し、温度0度における1粒
子の密度行列の熱力学的極限 $P(|x-x'|)$ を具体的に計算した。
それによれば、 $P(t)$ は、2階方程式

$$\frac{d^2 \lambda}{ds^2} = \left(\frac{1}{2\lambda} + \frac{1}{\lambda-1} \right) \left(\frac{d\lambda}{ds} \right)^2 - \frac{1}{s} \frac{d\lambda}{ds} + \frac{(\lambda-1)^2}{2s^2} \left(\lambda - \frac{1}{\lambda} \right) \\ - \frac{2\sqrt{-1}}{s} \lambda + 2 \frac{\lambda(\lambda+1)}{\lambda-1}$$

の解 $\lambda = \lambda(s)$ によって

$$(2) \quad P(t) = P_0 \exp \int_0^t \left(\frac{s}{4\lambda(1-\lambda)^2} \left(\left(\frac{d\lambda}{ds} \right)^2 + 4\lambda^2 \right) - \frac{(1+\lambda)^2}{4s} \right) ds$$

と表わされる。ここで上の非線型常微分方程式は、5型 パン
ルベ 方程式 P_V において $\alpha = -\beta = \frac{1}{2}$, $\sqrt{-1}\gamma = \delta = 2$, と
したものである。

これらの結果を見ると、(1)や(2)の被積分項にあらわれる λ と $\frac{d\lambda}{ds}$ の有理函数(以下 $R(s, \lambda, \frac{d\lambda}{ds})$ と書こう)は、もとの P_{III} , P_V に対してどういう意味をもつのか、また、

$$\exp \int^t R(s, \lambda(s), \frac{d\lambda(s)}{ds}) ds$$

というものの函数はどのような函数なのか、ということを考えるのは自然であろう。

そこで、まず I 型の方程式

$$P_I \quad \lambda'' = 6\lambda^2 + t \quad (\lambda' = \frac{d\lambda}{dt})$$

について古い結果を復習してみよう。 P_I の一般解は $\mathbb{C}$ 上定義され、その特異点は全て極である。すなわち P_I の解 $\lambda(t)$ は $\mathbb{C}$ 上の有理型函数であるが、 $\mathbb{C}$ 上の整函数 $\tau(t)$ があって

$$-\lambda(t) = \left(\frac{d}{dt}\right)^2 \log \tau(t) = (\tau(t)\tau'(t) - (\tau'(t))^2) / \tau(t)^2$$

と書ける([3])。この表示は有理型函数 $\lambda(t)$ を 2 つの整函数の比にかく、具体的表現を与える。他方、天下りだが、 λ と μ という 2 変数の 2 項式

$$H_I \quad H_I(t, \lambda, \mu) = \frac{1}{2}\mu^2 - 2\lambda^3 - t\lambda$$

をとると、ただちに P_I は ハミルトン系

$$(3) \quad \lambda' = \{\lambda, H_I\}, \quad \mu' = \{\mu, H_I\}$$

から μ を消去したものであることが確かめられる。ここで、

$$\{F, G\} = \frac{\partial F}{\partial \lambda} \frac{\partial G}{\partial \mu} - \frac{\partial F}{\partial \mu} \frac{\partial G}{\partial \lambda}$$

は通常の ポアソン括弧 である。この意味で P_I は ハミルトン系

(3)に同値である。さて(3)の一般解を $(\lambda(t), \mu(t))$ とし、函数

$$(4) \quad \sigma_I(t) = H_I(t, \lambda(t), \mu(t))$$

を定義すると、 $\sigma_I'(t) = \frac{\partial}{\partial t} H_I = -\lambda(t)$ であるから前にのべたこととあわせれば次の表示を得る。

$$\sigma_I(t) = \frac{d}{dt} \log \tau_I(t),$$

ここで $\tau_I(t) = \tau(t)$ は上の整函数である。(3)を用いて μ を $\lambda' = \frac{d\lambda}{dt}$ であらわせば、 $H_I(t, \lambda, \mu) = R_I(t, \lambda, \lambda')$ とも書けることに注意せよ。

我々はまずこの結果を他のパンルベの方程式に拡張する。パンルベの方程式とは、上の P_I と次の5つの方程式で与えられる。

$$P_{II} \quad \lambda'' = 2\lambda^3 + t\lambda + \alpha$$

$$P_{III} \quad \lambda'' = \frac{1}{\lambda}(\lambda')^2 - \frac{1}{t}\lambda' + \frac{1}{t}(\alpha\lambda^2 + \beta) + \gamma\lambda^3 + \frac{\delta}{\lambda}$$

$$P_{IV} \quad \lambda'' = \frac{1}{2\lambda}(\lambda')^2 + \frac{3}{2}\lambda^3 + 4t\lambda^2 + 2(t^2 - \alpha)\lambda + \frac{\beta}{\lambda}$$

$$P_V \quad \lambda'' = \left(\frac{1}{2\lambda} + \frac{1}{\lambda-1}\right)(\lambda')^2 - \frac{1}{t}\lambda' + \frac{(\lambda-1)^2}{t^2}(\alpha\lambda + \frac{\beta}{\lambda}) + \frac{\gamma}{t}\lambda + \delta \frac{\lambda(\lambda+1)}{\lambda-1}$$

$$P_{VI} \quad \lambda'' = \frac{1}{2}\left(\frac{1}{\lambda} + \frac{1}{\lambda-1} + \frac{1}{\lambda-t}\right)(\lambda')^2 - \left(\frac{1}{t} + \frac{1}{t-1} + \frac{1}{\lambda-t}\right)\lambda' + \frac{\lambda(\lambda-1)(\lambda-t)}{t^2(t-1)^2} \left(\alpha + \beta \frac{t}{\lambda^2} + \gamma \frac{t-1}{(\lambda-1)^2} + \delta \frac{t(t-1)}{(\lambda-t)^2}\right)$$

ここで $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ は複素定数である。以下、 P_J によって

ひとつのパンルベ方程式を代表させることにする。さらに、 $H_J(t, \lambda, \mu)$ を P_J に付随するハミルトニアン、 Σ_J を P_J の動かない特異点全体の集合（複素射影直線 P^1 の部分集合）とする。 P_J はハミルトン系(3)と同値である（ $H=H_J$ に対して）。 $(\lambda(t), \mu(t))$ をこのハミルトン系の一般解とし、(4)と同様に函数、 $\tau_J(t)$ を定義する。さらに

$$(5) \quad \tau_J(t) = \frac{d}{dt} \log \tau_J(t)$$

によって函数 $\tau_J(t)$ を定義する。この $\tau_J(t)$ を方程式 P_J の、ハミルトニアン H_J に関するτ函数と呼ぶ。結果を次に述べよう。

定理 各 P_J に対して、 λ と μ の多項式であるようなハミルトニアン H_J が存在し、これに関するτ函数は $P^1 \setminus \Sigma_J$ で正則となる。

$B_J = P^1 \setminus \Sigma_J$ とおく。 $\lambda(t), \mu(t)$ は B_J 上（もし B_J が単連結でなければ一般には多価）有理型であり、従って $\tau_J(t)$ もそうなる。上の定理に述べたハミルトニアンは一意的に定まるものではない。それどころか次の事実が成立する。 $J=II-IV$ に対して、

系 P_J に付随するハミルトニアン $H_J^{(i)}$ ($i=1, 2$) であって次のものが存在する： P_J の一般解 $\lambda(t)$ に対して、 $H_J^{(i)}$ に関する

るて函数を $\tau_J^{(i)}(t)$ とすれば

$$\lambda(t) = \frac{d}{dt} \log \tau_J^{(1)}(t) - \frac{d}{dt} \log \tau_J^{(2)}(t).$$

すなわち、 B_J 上有理型な解 $\lambda(t)$ は、 B_J 上正則な2つの函数、
 $(\tau_J^{(1)})' \tau_J^{(2)} - (\tau_J^{(2)})' \tau_J^{(1)}$ と $\tau_J^{(1)} \tau_J^{(2)}$ の比であらわされる。

この結果は、前に述べた P_E についての結果の拡張である。

本稿では定理の証明には立ち回らない。以下、関連するいくつかの話題について解説し、結果を紹介する。ハミルトニアン H_J の具体的な形はあとで表にまとめる。

歴史 $P_E \cdots P_E$ に対してその一般解 $\lambda(t)$ を正則函数の比で表現する具体的表示は既にパンルベによって試みられた。彼は P_E, P_E について、 λ と λ' の有理函数であって、解を代入したとき独立変数 t の函数としてある正則函数の対数微分として表わされるものをさがして、そのようなものの2つの差として $\lambda(t)$ が表わされることを示している。他方、 P_J が多項式型のハミルトニアンについてのハミルトン系と同値になるという事実は、それから20年程後にマルムキストによって初めて注意された。彼は、 F, G を y と z の多項式としたとき

$$\frac{dy}{dx} = F(x, y, z), \quad \frac{dz}{dx} = G(x, y, z)$$

という2連立方程式が動く分岐点をもたないための条件を求

めようとして、パンルベ方程式のハミルトン^(系)による表示に行きあたっている。 $P_{\text{II}}, P_{\text{V}}, P_{\text{VI}}$ のハミルトニアンを具体的に書いているが P_{III} については、同様にできるだろう、と言っているだけである。[4], [5]を参照せよ。我々の結果はこれら2つをあめせたものであると言えるが、後で与えるハミルトニアンは、マルムキストの発見したものや、パンルベがハミルトニアンを意識せずに発見した λ と λ' の有理函数とは同一ではない。

さて、パンルベの方程式が、ある2階線型方程式

$$\underline{L}_{\text{J}} \quad \frac{d^2}{dx^2} y = q(x, t, \lambda) y$$

の、モノドロミー・ストークス係数を不変にする変形理論から得られるということは、 P_{II} に対してはフックス、その他に対してはガルニエによって示されていた。細かい議論は[0], [6]を参照してもらうことにして、ここでは $\underline{L}_{\text{J}}$ の特異点だけを表にまとめておく。

表1 $\underline{L}_{\text{J}}$ の特異点

$\underline{L}_{\text{VI}}$	$x=0, 1, \infty, t, \lambda$ (<u>確定特異点</u>)
$\underline{L}_{\text{V}}$	$x=0, \infty, \lambda$ (<u>確定</u>) $x=1$ (<u>1級不確定</u>)
$\underline{L}_{\text{IV}}$	$x=0, \lambda$ (<u>確定</u>) $x=\infty$ (<u>2級不確定</u>)
$\underline{L}_{\text{III}}$	$x=\lambda$ (<u>確定</u>) $x=0, \infty$ (<u>1級不確定</u>)
$\underline{L}_{\text{I}}, \underline{L}_{\text{II}}$	$x=\lambda$ (<u>確定</u>), $x=\infty$ (<u>3級不確定</u>)

ただし、 $\chi=\lambda$ における特性指数の差は2で、しかもこの特異点是非対称的である。

L_{I} は L_{II} の退化したもので、 $\chi=\infty$ における局所形式解を求めると χ の分数巾があらわれる。この意味では、 L_{I} の無限遠点は $\frac{5}{2}$ 級の不確定特異点である。また、 L_{II} から L_{I} は、順次特異点の合流によって得られる。これを図式的に書くと下右

のようになる。これは、パンルベ方程式の退化の図式と完全に対応する。これらの事実をもち

いて、我々は P_j に付随するハミルトニアン H_j を

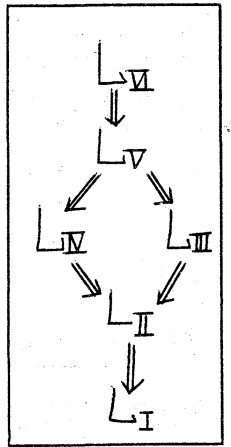
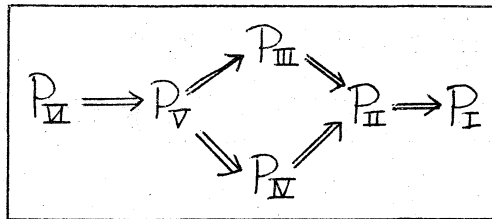
特徴づけていくこ

とにする。余談で

はあるが、パンル

ベ方程式をいろいろ調べてみると、 $(P_{\text{I}}, P_{\text{II}}, P_{\text{IV}})$, $(P_{\text{III}}, P_{\text{V}}, P_{\text{VI}})$ の2つのグループに分かれ、各々のグループのものはよく似た特性を示すことがある([7])。歴史的事情は仕方ないかもしれないが、 P_{III} と P_{V} はどうも番号をつけかえた方がよさそう

な気がする。



ハミルトニアンの特徴づけ

パンルベの方程式からハミルトニアンを見つけるには今のところ2つの方法がある。そのひとつは、 λ を変数とする空間 B_j を底、 χ を変数とする複

素直線 $\mathbb{C}$ をファイバーとするファイバー束 $\mathbb{C} \times B_J$ のコンパクト化をしらべるという方法である ([7], [8]). ここでは別の方法、線型方程式の変形理論によって ハミルトニアン を求める。そのためには、前節で述べた フックス や ガルニエ の結果やその計算のみちすじを再構成する必要がある。そうすることによって、次の事実にいきあたる。

命題 前節で考察した2階線型方程式 L_J のモロドロミーを不変にする変形は次の方程式で表わされる:

$$(6) \quad \frac{d\lambda}{dt} = \{\lambda, K_J\}, \quad \frac{d\bar{\mu}}{dt} = \{\bar{\mu}, K_J\}$$

ここに、 $\{\cdot, \cdot\}$ は通常のパアソン括弧、また、

$$\bar{\mu} = - \operatorname{Res}_{x=\lambda} p_J(x, t, \lambda)$$

である。 K_J は、 L_J が特異点 $x = \lambda$ において非対数的であるという条件から代数的に決定される。 λ と $\bar{\mu}$ と t に関する有理函数である。とくに L_{II} の場合は

$$K_{II} = \operatorname{Res}_{x=t} p_{II}(x, t, \lambda).$$

実は、 K_J は $\bar{\mu}$ については2次の多項式、とくに K_I, K_{II} は λ に関しても多項式である。とにかく、パンルベ方程式 を ハミルトン系 に書くことができたわけだが、これから多項式型の ハミルトニアン H_J を探したすのはむずかしくない。ここでも

詳細な議論、計算は一切省略することにして結果のみ書く。

命題 2階線型方程式

$$L_{H_J} \frac{d^2 y}{dx^2} + p_J^{(1)}(x, t, \lambda) \frac{dy}{dx} + p_J^{(2)}(x, t, \lambda) y = 0$$

で次のようなものが存在する。

(i) 特異点の集合は L_J のそれと同じである。

(ii) L_{H_J} のモノドロミー、ストークス係数を不変にする変形は、ハミルトン系

$$(8) \quad \frac{d\lambda}{dt} = \{\lambda, H_J\}, \quad \frac{d\mu}{dt} = \{\mu, H_J\}$$

を導く。ここに

$$(9) \quad \mu = \operatorname{Res}_{x=\lambda} p_J^{(2)}(x, t, \lambda).$$

(iii) (8)は P_J と同値である。 H_J は、 λ と μ に関する多項式で、 L_{H_J} から代数的に計算できる。とくに

$$(10) \quad H_J = - \operatorname{Res}_{x=t} p_J^{(2)}(x, t, \lambda)$$

(iv) (8)と(6)は互いに正準変換により結びあう。

このようにして求めた $H_J(t, \lambda, \mu)$ において、 P_J に固有な正準変数は λ である。今、新たに $\tilde{H}_J(t, \lambda, \mu)$ を

$$(ii) \quad \tilde{H}_J(t, \lambda, \mu) = \frac{1}{a} H_J(t, \lambda, a\mu + b) + \phi(t)$$

$a(\neq 0)$, b は定数, $\phi(t)$ は P_J 上正則な t の函数

により定義しても、 $\tilde{H}_J$ はやはり P_J に付随する ハミルトニアン

である。各々に関するて函数をそれぞれ $\tau_J, \tilde{\tau}_J$ とすれば (11) は

$$\tilde{\tau}_J(t) = \Phi(t) \tau_J(t)^{\alpha^{-1}}, \quad \frac{d}{dt} \log \Phi(t) = \phi(t)$$

という関係を与える。(11) は正準変換ではないが、必要に応じて H_J を $\tilde{H}_J$ に変えることは許すことにする。

ハミルトニアン 次に、上記定理におけるハミルトニアンの表を与える。ここでは、 $H_J(t, 0, 0) = 0$ となるようにしているがこれは本質的なものではない。

$$\underline{H_I} \quad \frac{1}{2} \mu^2 - 2\lambda^3 - t\lambda$$

$$\underline{H_{II}} \quad \frac{1}{2} \mu^2 + (\lambda^2 + \frac{1}{2}t)\mu - \frac{1}{2}(2\alpha - 1)\lambda$$

$$\underline{H_{III}} \quad \frac{1}{t} [\lambda^2 \mu^2 - (\eta_\infty t \lambda^2 + \theta_0 \lambda - \eta_0 t) \mu + t\kappa \lambda]$$

$$\underline{H_{IV}} \quad 2\lambda \mu^2 - (\lambda^2 + 2t\lambda + \theta_0) \mu + \frac{1}{2} \eta_0 \lambda$$

$$\underline{H_V} \quad \frac{1}{t} [\lambda(\lambda-1)^2 \mu^2 - ((\theta_0 + \theta_1)(\lambda-1)^2 + (\theta_1 + \eta_1 t)(\lambda-1) + \eta_1 t) \mu + \kappa \lambda]$$

$$\underline{H_{VI}} \quad \frac{1}{t(t-1)} [\lambda(\lambda-1)(\lambda-t) \mu^2 - (\theta_0(\lambda-1)(\lambda-t) + \theta_1 \lambda(\lambda-t) + (\theta_t - 1)\lambda(\lambda-1)) \mu + \kappa \lambda]$$

ここで、 θ, η 等は定数であるが、これは、 P_J の定数 α, β 等と次のように関係している。

$$\underline{H_{III}} \quad \alpha = -\eta_\infty(1 + \theta_\infty), \quad \beta = \eta_0(1 + \theta_0), \\ \gamma = \eta_\infty^2, \quad \delta = -\eta_0^2,$$

$$\kappa = \frac{1}{2}\eta_{\infty}(\theta_0 + \theta_{\infty}),$$

$$\underline{H_{IV}} \quad \alpha = \eta_0 + 1 - \frac{1}{2}\theta_0, \quad \beta = -\frac{1}{2}\theta_0^2$$

$$\underline{H_V} \quad \alpha = \frac{1}{2}\theta_{\infty}^2, \quad \beta = -\frac{1}{2}\theta_0^2$$

$$\gamma = -\eta_1(\theta_1 + 1), \quad \delta = -\frac{1}{2}\eta_1^2$$

$$\kappa = \frac{1}{4}((\theta_0 + \theta_1)^2 - \theta_{\infty}^2),$$

$$\underline{H_{VI}} \quad \alpha = \frac{1}{2}\theta_{\infty}^2, \quad \beta = -\frac{1}{2}\theta_0^2,$$

$$\gamma = \frac{1}{2}\theta_1^2, \quad \delta = \frac{1}{2} - \frac{1}{2}\theta_t^2,$$

$$\kappa = \frac{1}{4}((\theta_0 + \theta_1 + \theta_t - 1)^2 - \theta_{\infty}^2).$$

とくに H_{III} において、

$$\eta_0 = \eta_{\infty} = -\theta_0 = -\kappa = 1$$

とし、さらに、 $\tilde{H}_{III}(t, \lambda, \tilde{\mu})$ を

$$\tilde{H}_{III}(t, \lambda, \tilde{\mu}) = -H_{III}(-t, \lambda, \tilde{\mu})$$

で定義する。これらは P_{III} において $\alpha = \beta = 0$, $\gamma = -\delta = 1$ としたものに付随するハミルトニアンである。さらに、 $H_{III} + \frac{1}{4t}$, $\tilde{H}_{III} + \frac{1}{4t}$ に関する τ 函数を $\tau_{III}(t)$, $\tilde{\tau}_{III}(t)$ とすれば、2次元 Ising モデルの scaling 函数 $F(t)$ の表示(1)は次のようになる:

$$F(t) \sim \sqrt{\tau_{III}(t)\tilde{\tau}_{III}(t)}, \quad t \leq \frac{1}{2}t.$$

次に、 H_V において、

$$\theta_1 = 0, \quad \eta_1 = \theta_0 = 1, \quad \kappa = 0$$

とし、ハミルトニアン $H_V + \sqrt{1-t}^{-1}$ に関する τ 函数を τ_V

とすると、序でのベタ(2)は、

$$\rho(t) = \tau_{\rho}(t)$$

と同じことである。これらは、ハミルトニアンにおいて正準変数 μ を λ' で書いてみればただちにわかることである。これらの例はいずれも パンルベ方程式において τ 函数が重要であることをほのめかしている。 τ 函数のもつ意味を示唆する例をもうひとつあげよう。 P_I において、 $t = \epsilon t^* - \frac{1}{2}\epsilon^4 g_2$, $\lambda = \epsilon^2 \lambda^*$ とおくと方程式

$$(12) \quad \frac{d^2 \lambda^*}{dt^{*2}} = 6(\lambda^*)^2 + \epsilon^5 t^* - \frac{1}{2} g_2$$

を得る。 g_2 は定数である。 (t^*, λ^*) を改めて (t, λ) と書き、(12) の ハミルトニアン $H_I = \frac{1}{2}\mu^2 - 2\lambda^3 - (\epsilon^5 t - \frac{1}{2}g_2)\lambda$ に関する τ 函数を $\tau_I(t; \epsilon)$ とすると、 $\lambda(t; \epsilon)$ を (12) の解としたとき、

$$\frac{d^2}{dt^2} \log \tau_I(t; \epsilon) = -\epsilon^5 \lambda(t; \epsilon).$$

ところが、(12) で $\epsilon = 0$ とすれば、(12) は楕円函数 $\rho(t)$ の満たす方程式である。従って、 $\lambda(t; \epsilon)$, $\tau_I(t; \epsilon)^{\epsilon^{-5}}$ の $\epsilon \rightarrow 0$ としたときの極限、 $\lambda(t; 0)$, $\tau_I^0(t)$ が定義できたとすれば、

$$\frac{d^2}{dt^2} \log \tau_I^0(t) = -\lambda(t; 0) = -\rho(t)$$

であるから、 τ 函数の極限は

$$\tau_I^0(t) = e^{\eta t^2 \frac{\vartheta_1(t)}{\vartheta_1'(0)}}$$

である。この荒い議論が正統化できれば、 τ 函数は ϑ 函数の一般化としての意味をもつことができるであろう。

P_{II} について これまで、一般の P_J についていくつかの結果を証明なしに述べてきたが、次に特に P_{II} に話を限って、上記の結果の証明の概略も含めていくつかの話題を紹介する。それらは、他の P_J についても同様であろうが、きちんとした証明、計算は完了していない。

さて、 P_{II} のハミルトニアンは

$$H_{II} = \frac{1}{2}\mu^2 + (\lambda^2 + \frac{1}{2}t)\mu - \frac{1}{2}(2\alpha-1)\lambda$$

である。これに、 $(\lambda(t), \mu(t))$ という解を代入したものを前のように $\sigma_{II}(t)$ と書くが、本節では断わらぬ限り P_{II} しか考察しないので添字 II は省略する。 $\sigma(t)$ は $\lambda(t), \mu(t)$ が正則ならば正則である。いま $t=t_0$ が $\lambda(t)$ の極であつたとする。すると方程式 P_{II} から、 $t=t_0$ は1位の極であり、かつ

$$\lim_{t \rightarrow t_0} \lambda(t) = \pm 1$$

となることがわかる。局所展開はこれに対応して、

$$(13)_1 \quad \lambda(t) = + \frac{1}{t-t_0} \left(1 - \frac{t_0}{6}(t-t_0)^2 - \frac{\alpha+1}{4}(t-t_0)^3 + \dots \right)$$

$$(13)_2 \quad \lambda(t) = - \frac{1}{t-t_0} \left(1 - \frac{t_0}{6}(t-t_0)^2 + \frac{\alpha-1}{4}(t-t_0)^3 + \dots \right)$$

となる。すると再び方程式から、 $\mu(t)$ の展開は各々の場合について計算できて、

$$(14)_1 \quad \mu(t) = - \frac{2}{(t-t_0)^2} \left(1 + \frac{t_0}{6}(t-t_0)^2 + \frac{1}{4}(t-t_0)^3 + \dots \right)$$

$$(14)_2 \quad \mu(t) = - \frac{2\alpha-1}{2} (t-t_0) \left(1 + \dots \right)$$

を得るから、これを H に代入して $\sigma(t)$ の $t=t_0$ でのふるまい

がわかる。実行してみると(13)₁-(14)₁の場合、

$$\sigma(t) = \frac{1}{t-t_0} (1 + \dots)$$

他方は、 $\sigma(t)$ は $t=t_0$ で正則であることがわかる。従って

$$\tau(t) = \exp \int \sigma(s) ds$$

は、 $\mathbb{C}$ 上正則であり、その零点は対応する解 $\lambda(t)$ の留数が+1であるような極においてあらわれる。

P_{II} は次の2階線型方程式のモノドロミー不変な変形を決める([01]):

$$(15) \quad y'' + (2x^2 + t - \frac{1}{x-\lambda})y' + (\frac{\mu}{x-\lambda} - 2H - (2\alpha+1)x)y = 0,$$

ここで $' = \frac{d}{dx}$, H はハミルトニアンである。

$$(16) \quad Z = \left\{ \exp \int (2\xi^2 + t) d\xi \right\} y$$

という変数変換をすると(15)は

$$(17) \quad z'' - (2x^2 + t + \frac{1}{x-\lambda})z' + (\frac{\bar{\mu}}{x-\lambda} - 2\bar{H} - (2\alpha+1)x)z = 0$$

となり、さらに

$$\bar{\mu} = \mu + 2\lambda^2 + t$$

$$\bar{H} = \frac{1}{2}\bar{\mu}^2 - (\lambda^2 + \frac{1}{2}t)\bar{\mu} - \frac{2\alpha+1}{2}\lambda = H - \lambda$$

を得る。 $\bar{\mu}$ は μ の複素共役とは関係ない、念のため。さて、

(17)の変形を考えると、これはハミルトン系

$$\frac{d\lambda}{dt} = \{\lambda, \bar{H}\}, \quad \frac{d\mu}{dt} = \{\mu, \bar{H}\}$$

を導き、これから $\bar{\mu}$ を消去すれば再び λ の方程式として P_{II} を

得る。 $\bar{H}$ から前のように函数 $\bar{\sigma}(t)$ を作れば、これは $\sigma(t)$ と同

様のふるまいを示す。すなわち

$$\bar{\tau}(t) = \exp \int^t \bar{\sigma}(s) ds$$

は整函数となる。ただし今度は $\bar{\tau}(t)$ の零点 $t=t_0$ は解 $\lambda(t)$ の留数 -1 であるような極に対応する。線型方程式の変換(16)により新しいハミルトニアン $\bar{H} = H - \lambda$ と正準変数 $\bar{\mu}$ が定義されたがこれは正準変換である。実際、

$$\bar{\mu} d\lambda - \bar{H} dt = \mu d\lambda - H dt + d\left(\frac{2}{3}\lambda^3 + t\lambda\right).$$

以上のことから特に、 $\bar{\sigma}(t) = \sigma(t) - \lambda(t)$ 、あるいは

$$\begin{aligned} \lambda(t) &= \frac{d}{dt} \log \tau(t) - \frac{d}{dt} \log \bar{\tau}(t) \\ &= (\tau'(t)\bar{\tau}(t) - \tau(t)\bar{\tau}'(t)) / \tau(t)\bar{\tau}(t). \end{aligned}$$

これにより、有理型函数 $\lambda(t)$ が τ 函数を用いて正則函数の比に書けた。

次に $\sigma(t)$ は2階非線型方程式をみたす。これを具体的に求めてみよう。まず

$$\begin{aligned} \frac{d\sigma}{dt} &= \frac{\partial H}{\partial t} = \frac{1}{2}\mu, \\ \frac{d^2\sigma}{dt^2} &= \frac{1}{2} \frac{d\mu}{dt} = \frac{2\alpha-1}{4} - \lambda\mu \end{aligned}$$

から

$$(18) \quad \mu = 2 \frac{d\sigma}{dt}, \quad \lambda = \left(\frac{2\alpha-1}{4} - \frac{d^2\sigma}{dt^2} \right) / 2 \frac{d\sigma}{dt}$$

これを H に代入して整理すれば、結局、

$$\left(\frac{d^2\sigma}{dt^2} \right)^2 + 4 \left(\frac{d\sigma}{dt} \right)^3 + 2t \left(\frac{d\sigma}{dt} \right)^2 - 2\sigma \frac{d\sigma}{dt} - \left(\frac{2\alpha-1}{4} \right)^2 = 0$$

この方程式から次のことがわかる。方程式 $\frac{d^2\lambda}{dt^2} = 2\lambda^3 + t\lambda + \alpha$

の解を以下 $\lambda(t, \alpha)$, これから定まる μ, σ を $\mu(t, \alpha), \sigma(t, \alpha)$ 等と書こう。すると(18)からただちに次のことがわかる。

命題 $\sigma(t, \alpha)$ と $\sigma(t, 1-\alpha)$ は同じ方程式の解である。

いま、 $\sigma(t, \alpha) = \sigma(t, 1-\alpha)$ となるようにとると、これに対応する $\lambda(t, \alpha), \mu(t, \alpha), \lambda(t, 1-\alpha), \mu(t, 1-\alpha)$ は、(18)の前に書いてある関係式から、

$$\begin{aligned} \mu(t, \alpha) &= \mu(t, 1-\alpha), \\ (19) \quad \lambda(t, 1-\alpha) &= \lambda(t, \alpha) - \frac{2\alpha-1}{2} \mu(t, \alpha)^{-1} \end{aligned}$$

という関係で結びついている。これを用いて、 $\lambda(t, \alpha)$ と、 α を1だけ増した方程式の解 $\lambda(t, \alpha+1)$ の間の関係が求まる。まず、(19)は正準変換であること、および

$$\mu(t, \alpha) = \frac{d}{d\alpha} \lambda(t, \alpha) - \lambda(t, \alpha)^2 - \frac{t}{2}$$

に注意する。さらに、 $(\lambda, \mu) \rightarrow (-\lambda, -\bar{\mu})$ は正準変換であり、かつ方程式 R から直接

$$\lambda(t, \alpha) = -\lambda(t, -\alpha)$$

ということがわかる。これと(19)から、

$$\lambda(t, 1-\alpha) = -\lambda(t, -\alpha) + \frac{2\alpha-1}{2} \bar{\mu}(t, -\alpha)^{-1}.$$

この時、Hの式から、 $\sigma \rightarrow \bar{\sigma}$ という変換をうける。すなわち $\sigma(t, \alpha) = \bar{\sigma}(t, -\alpha)$ となり、従って上の式で $\bar{\mu}$ と書いた。方

程式(18)を見よ。 α を $-\alpha$ でおきかえれば、 $\lambda(t, \alpha+1)$ を $\lambda(t, \alpha)$ で表現できる。ところが(19)を逆に解いて $\lambda(t, \alpha)$ を $\lambda(t, 1-\alpha)$ により表わすことはできるから、この関係も逆に解け、 $\lambda(t, \alpha)$ を $\lambda(t, \alpha+1)$ で表現することもできる。すなわち、この関係式は、一般解と一般解の間の対応である。さらに、

$$\sigma(t, 1+\alpha) = \sigma(t, -\alpha) = \bar{\sigma}(t, \alpha) = \sigma(t, \alpha) - \lambda(t, \alpha)$$

に注意して、次のことがわかる。

定理 1 $\lambda(t, \alpha+1) = -\lambda(t, \alpha) - \frac{2\alpha+1}{2} \left(\frac{d}{dt} \lambda(t, \alpha) + \lambda^2(t, \alpha) + \frac{t}{2} \right)^{-1}$

これは逆に解けて

$$\lambda(t, \alpha) = -\lambda(t, \alpha+1) + \frac{2\alpha+1}{2} \left(\frac{d}{dt} \lambda(t, \alpha+1) - \lambda^2(t, \alpha+1) - \frac{t}{2} \right)^{-1}$$

ただし、 $\alpha = -\frac{1}{2}$ のときは、右辺の2項は0と思う。さらに

$$\lambda(t, \alpha) = \sigma(t, \alpha) - \sigma(t, 1+\alpha)$$

とくに $\alpha = \frac{1}{2}$ とすると P_H はリッカチ方程式

$$\frac{d\lambda}{dt} - \lambda^2 - \frac{1}{2}t = 0$$

の解を特殊解としてもつ。この解を $\lambda_0(t)$ とおく。たとえば

$$\lambda_0(t) = A_2'(\frac{1}{\sqrt{2}}t) / A_2(\frac{1}{\sqrt{2}}t)$$

A_2 はエアリ函数をあらわす。また、 $\alpha = -1$ としたものは、

$\lambda = \frac{1}{t}$ を特殊解としてもつ。従って、定理1をこの場合に

適用すると 2α が整数であるような P_H は特殊解として $\lambda_0(t)$ の

有理函数、 t の有理函数をもつ。すなわち、この場合は P_5 は
パンルベの意味では「古典超越函数に対して既約」ではない。

定理2 n を整数とする。 $\alpha = \frac{1}{2}(2m+1)$ のとき P_5 は、あるリッ
 カチ方程式の解 $y(t)$ の有理函数となる特殊解をもち、 $\alpha = n$
 ならば t の有理函数であるような特殊解をもつ。

ここであげた以外の α に対して P_5 が古典超越函数であらわさ
 るような特殊解をもつかどうかはわからない。

また、上記定理1, 2 が $P_5 \dots P_5$ に対しても同様に成立
 するかどうかについては現在調べているが、まだ完全にはわ
 かっていない。

文献

- [0], K. OKAMOTO Polynomial Hamiltonians associated to the Painlevé equations. preprint
- [1], T. T. WU - B. M. MCCOY - C. A. TRACY - E. BAROUCH,
Phy. Rev. B13 (1976)
- [2], M. JIMBO - T. MIWA - Y. MORI - M. SATO, RIMS preprint
No. 303 (1979)
- [3] P. PAINLEVÉ, Oeuvre, t III, p 89
- [4] P. PAINLEVÉ, Oeuvre, t III, p 123
- [5] J. MALMQVIST. Ark. Mat. Astr. Fys. 17 (1922/23)
- [6] R. GARNIER Ann. Ecole Norm. Sup. 3, 27 (1912)
- [7] K. OKAMOTO Japanese J. of Math. 5 (1979)
- [8] 岡本和夫 雑誌「数学」 32巻1号 (1980)
- [9], H. AIRAULT Studies in Appl. Math. 61 (1979)

本稿で述べたことは、[0]に詳細も含めてまとめている。また、定理1, 2については[9]も参照